



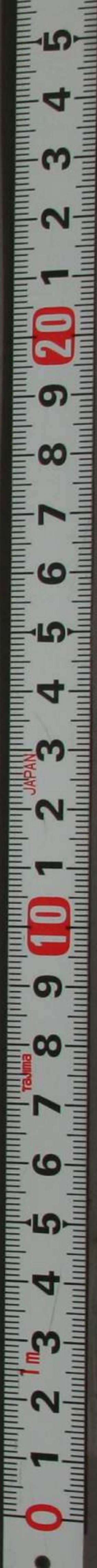
里見八犬傳

第五輯

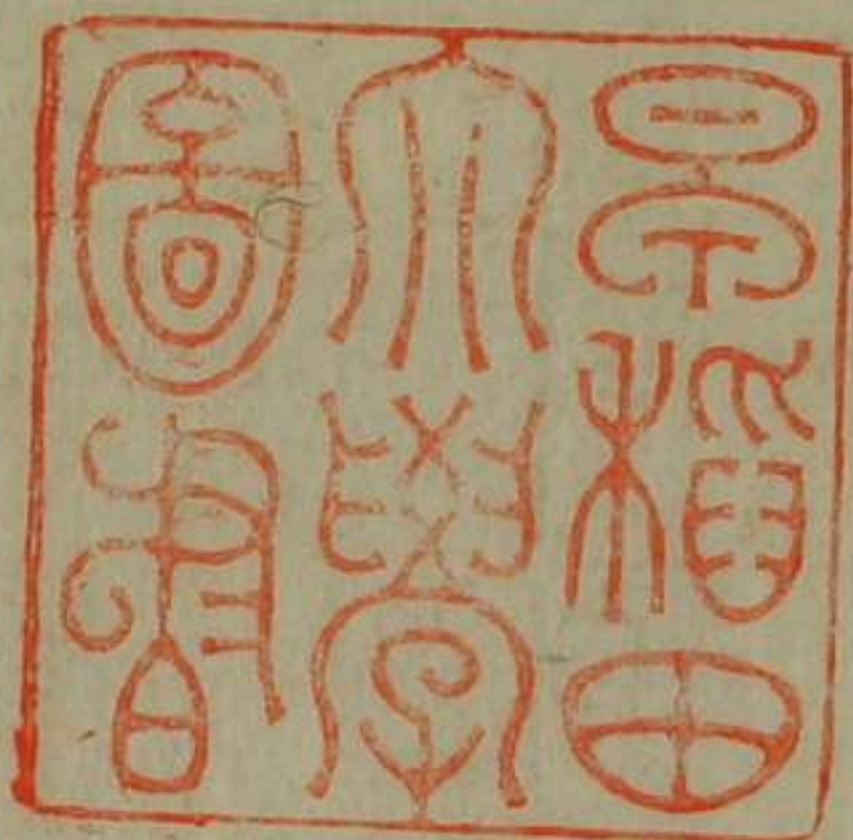
卷五



~13  
709  
25



門 遠 13  
 號 709  
 卷 25



明治三六年  
 十月九日  
 購求

南總里見八犬傳第五輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第四十九回

陰鬼陽人 肇て判然  
 節義貞操 迭ふ苦諫屯

カニ郎尺八ホをひひひなく父措平が甲夜の間に立しを音音が拒て  
 容ざる一とつて俱より驚きく頻々嘆息をりく音音も今さう後悔の  
 額を撫く嗟嘆し現彼人の心操義小仗も恥をあらせもあらば故主の為心  
 盡せ此度の功を子共小議りく船を沈めて戸田河の底の水屑小ありあらんや  
 然ともあつて縁が亡魂の門小立司小を情由とふゆを其の隨小罵辱を  
 するればむね心と葛の葉のうらふありて為迷小旅宿あるの草の原帰る  
 りもあきまふ冥土の障とありせし痛おしめを密音小久くあつて歎けは









五

英泉画



顔のまらちも成られて口を拵く呆れてまう。さうれ音音ハ油断せぬ半信半疑の膝を  
 進めく瞬もせむ。借平をうらむ。僅小領起す。いも趣ありあれども胡越は等し。死焼雪  
 ぬ。今さう忌も憚りて吾俯を訪き。土産の二種との斬首ハつらむ。あやむ。況んが  
 戸田河へ入水のまの甲夜の間に犬川莊助とらふ。流浪人が竊小和子小報とて死  
 吾俯の巨細小竊笑う。然るを死力の恙なく武藏の盡処よりあくと。あ。小まき。小  
 つらむ。あ。これ疑ひのニツあり。且死刃が入水のまの獨犬川が笑いのまを。カニ郎八も  
 當日の戦ひ云々と報り。ものをあひた。告。子共を真柴焼く朝の炊き。いも  
 煙のまら滅失て今又死刃不見えん。いは疑ひの三ありけ。あ。その死刃が變化  
 中。だ。兩個の子共とを。さ。抑亦何ものま。あ。ろ。ぬ。く。死。ま。を。と。詰。問。れ。て  
 借平ハ件の首級を。と。ん。か。ん。て。縁。故。を。詳。し。せ。ひ。バ。然。る。疑。ひ。ハ。理。り。あ。れ。ば。も。ま。武。藏  
 より携きて甲夜小單節小遞与る。二包ハこれ。あ。だ。あ。母。この外小物。あ。ん。納。り。あ。を

索。く。ん。と。い。の。小。單。節。ハ。誂。と。あ。ひ。又。舊。の。棚。の。袋。戸。推。却。け。ハ。曳。も。俱。脂  
 燭。して。彼。此。隈。あ。く。畷。獵。も。も。れ。秋。と。む。小。物。も。中。尚。置。処。の。違。ふ。秋。と。之。夜。具。措。く  
 破。戸。棚。と。せ。り。な。く。え。れ。果。と。物。あり。秋。の。色。異。れ。ば。も。その。二。包。を。結。合。せ。し。れ  
 彼。共。ふ。あ。く。似。り。單。節。ハ。ま。く。両。手。を。う。け。て。棚。あり。あ。を。取。り。あ。これ。あ。あ。と  
 指示。せ。六。借。平。う。あ。ん。と。これ。なり。これ。あり。且。く。其。処。小。措。後。う。と。い。れ。く。單。節。ハ  
 あり。を。ぬ。む。不。思。議。の。う。む。を。ゆ。る。ま。が。甲。夜。受。り。一。包。が。平。く。これ。あ。あ。  
 收。置。く。ま。小。戸。棚。あ。あ。死。め。を。あ。の。間。小。処。を。か。え。一。中。や。ん。加。梅。く。似。あ。是。被。四。箇。ハ  
 表。物。初。の。度。ま。う。り。あ。う。と。の。二。包。ハ。何。人。が。り。て。ま。を。隠。一。置。り。ま。ん。これ。も。怪。れ。り。あ。あ。  
 む。あ。と。い。ひ。ひ。傷。を。え。ん。ま。音。音。曳。も。呆。果。く。寔。小。甲。夜。より。曉。る。ま。を。あ。あ。あ。あ。  
 り。の。ま。ま。う。り。み。あ。是。物。の。障。礙。を。必。油。断。ま。あ。と。心。つ。れ。が。怖。氣。あ。三。人。ま。ま。あ。  
 女子の智慧の浅瀬を流る遠漁火人秋鬼秋と借平小疑ひの母釋さう。早。う。早。う。て

稽平のあひゆうし勝るむ設く音音まの疑ひも物かぬ包のふへ推量の  
 ともそのすれとまうはれけよの地へある折身長隆記一個の武士松小西箇の包を著  
 一が白井のうらう走り先小立つ邁くありけり先小彼邊之机撃のすの趣  
 その風音を途すては是彼あひあつた道節ぬわむをまも心つた一うが  
 初まつたも跡を跟くは矢つと程小既わく日暮うかそ初更の左側小件の  
 武士の杜蔭の塚の海より立よりまをそのとたれぬ樹隠れてその為体を窺ひし  
 天結陰りく闇も定つた見えも腰の包を取出す塚子贈贈て祭ると  
 初められ又情ありあやう彼人の贈贈し物の雙の首級状ともわらばまう推量は  
 道節ぬふをあち近つた問をまもあつた一個の癖者塚の蔭より  
 頭れゆく件の包を取らんとはあこの武士の取せとそ挑争ふ力且早技優ること  
 劣の如法夜不亂れぬ巻の奇々妙々まをそ時を移し一箇は必傷けけん

且雙方を推鎮くその名を問んと老後の腕立走蒐りてこの杖を二人が問へる突  
 立と推分んとせしは肩より掛る両箇の包をあらば撲地と落し慌忙に彼此と  
 撥擲當り取る程小彼癖者が後閃る刀尖狂々石塔を研削りる石火の光小件の  
 武士も両箇の包を引提く直躬と立ちとええる形の消く往方を知は是れ火道の  
 御るべし奇樹を獲るう一人の道節ぬわらば誰も亦あふ至らんその名を  
 問はれども必彼問あふと必決あ慕いよ要時あは又舊の野路をこ  
 ちへ走る癖者も亦茂林より頻りふれを追ふれども及きりせんあまむの  
 續記てもるだかりけりかそくえれはあまむの門邊小立しとれ単節が癖小  
 憐しく柴小屋へと懇せりか程小莊役が白井の下知を他人の癖の趣淺く  
 えそ心ふかれは尻もあわぬを竊ふ其処を立せり或は背門より庭面より問か母屋小  
 ありをつけし小渠より先ふらつたあふある兩人ありをの二人の道節ぬ彼癖者





死喪の如き涙の雨の袖を絞るもあむ泣論む憂も漏れぬ積半も慰め  
 る頭を低く斑の齒を昨締るれりも身を攻念仏胸の急鉦らうとも憂も  
 るぬ人間不道れぬの現會者定離かうもあれと觀念の眼を閉てもあり落る  
 涙不噎く泣然う當下音音のやうなうな志氣を擧げて原來子共を撃れぬ  
 けの心やうもあふたふとの戦殺の為体を定離さよとひひれぬ思は單節の  
 積平が左右の膝を衝詰て世の死人歎と疑ひ大人に還る恙なく恙も  
 なくつかへぬ勢を多ひ一人の死顔をゆび又ひる武藏の家裏開て悔し死  
 浦島の如死玉匣をりる果かう果し趣をあらせくむ孫の如くも南大人と  
 呼ぶにま同い言も枯れぬ死歎たまを穂の繁葉外に降らぬ驟雨は撲り  
 如く俯沈む媳婦と媳婦とふとく泣立のれ積平の涙の目皮あがらぬ死  
 うらうと幾遍泣いたとまれが生憎小塞る胸を巻きて搏つ息を吻とつ死

これらの事同れども詳ふ告んとあむ恥かやうくこれやの訪ん音音も勿泣を  
 媳の連涙を禁めて泣けり大約人の幸不幸倚伏の糾ふ纏ふ似たり我れ犯す  
 罪科を肩のれくもえれく快らぬ老後の寸功兩個の手共は譲らんとあむ決りて  
 戸田河小投ふけれ死も結果に年来熟る水枝の邪魔よかりやあむも浅瀬の  
 々々流され東の岸は著しなと浅ましく朽をたががれと今も小葉命を  
 怒よ助す神の恨く濡る涙は忙然と且く水際よ立在つとものかかても業報のあむ  
 滅びどとありあう。あむふくもあむぬ者の水も入らぬ死れぬもの。とあむ彼大塚の  
 城兵士と刺さる。其処は骸を曝人とあむ苦し死恩愛の絆は牽き凡夫心子  
 共の先途をよまほし。あむ舊の岸邊小赴けが戦ひ果て人影なく敵致射方彼  
 此小俯横する死骸あり喜まが子共を撃れぬとあむつらうも暗に夜よその生死の  
 迹を索る送もなく檢せしと暗に身甲の威の色も見えらる所。軀のこわく

定る所。この故を捨果し命を要時存在するに子共の存亡を定む。後ふともかともか。と多ひく。その曉に神宮多宿所より走りぬる心竊に準備し。姿を変え次の日は大塚へ赴け。街談備説を傍向ひ。戸田河原の戦ひ。陣番下田町進ハカニ郎は撃たれ。まづれその隊の兵を東の岸に踏留り。尺八と戦ふ。折カニ郎は授来く胞兄弟力を勤める奮戦突戦瞬間は雑兵影刺伏せ。頻に克は乗るの。町進が属役ハ仁田山晋五と呼ぶ。その四五十名の隊兵をぬく大塚より援軍の連放。鳥銃ハカニ郎も尺八も灸所の砲音。竟は堪む。間近に敵と引組。刺ちへて伏す。け。か。く。属役仁田山晋五六カニ尺八が首捕て大塚へ既陣。その功は誇らん。カニ郎が首級をとり大塚信乃と偽り唱へ尺八が首級をとり小所額藏と偽り唱へ。け。や。も。庚申塚の邊。多。棟樹の下。泉。う。ま。と。緋。人。口。は。隠。れ。か。け。れ。ぬ。子。共。を。先。と。と。く。死。後。れ。る。老。が。身。の。方。も。な。ら。鬱。憤。は。腸。を。断。敷。け。く。獨。つ。ら。く。あ。の。や。う。

泉首せら子共が。悔むもその甲斐ある。ね。枝。人。が。偽。り。大。塚。犬。川。両。豪。傑。の。恥。を。雪。ぐ。云。云。と。か。方。が。由。中。の。人。々。も。報。ん。ど。の。ぞ。官。が。人。が。要。時。あ。ぶ。世。小。の。目。を。消。も。一。日。千。秋。ま。れ。が。更。蘭。人。定。り。て。庚。申。塚。小。赴。け。心。當。り。棟。樹。の。下。へ。潜。び。近。つ。死。辛。し。て。取。ち。せ。し。子。共。の。首。を。豫。て。准。備。の。行。祇。小。推。包。を。引。提。て。走。こ。る。あ。の。い。く。ど。く。の。近。邊。小。夜。を。衛。す。兩。個。の。楯。卒。棒。杖。も。追。蒐。来。て。癖。者。等。呼。制。り。緋。既。小。急。死。れ。が。兩。箇。の。色。を。秋。草。の。中。に。隠。し。て。些。も。擬。議。せ。ば。返。し。あ。は。れ。引。つ。け。て。見。ま。と。技。る。朴。刀。の。花。の。着。み。お。わ。え。の。業。物。先。進。三。楯。卒。を。は。く。と。ず。ん。と。秋。伏。せ。ぬ。か。を。刃。小。又。一。卒。の。棒。り。共。よ。は。首。を。撃。ち。落。し。つ。り。入。り。く。凶。ら。る。二。の。大。刀。小。左。の。齋。り。乳。の。下。ま。乾。竹。削。み。血。け。り。立。る。刃。の。牙。は。叫。び。も。又。重。身。を。轉。し。て。付。き。さ。り。これ。聊。慰。め。る。も。あ。く。鮮。血。を。拭。ひ。納。め。し。朴。刀。も。叢。を。き。け。く。包。を。取。ち。又。携。り。く。戸。田。河。を。歩。涉。し。て。三。四。日。と。夜。を。日。は。續。く。こ。の。地。は。來。る。一。切。が。身。の。為。か。た。件。

夏の趣を由縁のゆゑに送る力二郎凡八が忠死義歿を誰れ傳へん音音八年  
 来中絶しを再會快く後にも渠が死てその人か法を踏むこれ人情美を  
 進むに公道あり故主のゆゑも子共のゆゑも両方う己べくとてあやうふ阿容を  
 の隠宅に索すの既往をまご云云と報後ばうく罵られ拒れてもあはれ懲り  
 あつて一宵をぬし柴の小屋に憩え外から故主のうと子共が魂を綱つ又願  
 哀歎交腸も袖もぬ離る感涙を絞るあまふ不思議の一條力二郎凡八死  
 五日よりぬれども靈はこの土を去らぬく在一面影まきげふ且くあはれ願  
 母と妻とを慰めぬ鳴呼孝あり義ありその折られぬ立一彼暗譚を  
 障子の透すはくくと見ふ勝ねば呼くくお形圓坐し入るおとを物  
 くの頭の携りたるは達バ消え夫と隣隣し生を隔る紙一重佛を  
 憑む唱名も音をそ立の終夜涙は暇ぬ魂を誰促はあはれぬと八声の鶏の

鳴びを驚されく冥土の陰火の光り鮮々と窓より照るをれひさう振向える心の  
 ねがひ今もあはれ身達よりかあおあま胸の苦り泣く口説立く告れば  
 音音も媳婦同胞も哽かへり泣く外もあはれ哀悼悲愁のそが中に  
 音音は僅よひひせし頭を擡て喃曳は單節もこのと歎たあま妻子の涙は死  
 人の身かると昔よりいふを實歎然もあはれ後世に人の大うかれ九貴は賤なる  
 武弁の家は仕へる命を豫くおたのめとあひあはれ人か小捷れ忠も義もあつた  
 主の先途おあはれぬも教を守り義ははるく愛した友を薦んぬふとの日の歌も外  
 知らぬ亦是讐の麾下の武士大石兵衛が陣番を撃捕するを大塚大川西雄の  
 身かひせせれ死して栄ある子共が武功この人かは父も父なり子も子なり  
 扱も面も積平との恩も負ぬ誠心の子共も功を譲らんと捨命の盡せぬ  
 神の祐依佛力歎きぬ力二尺八が孝心其れは船とあり枝とあり早河の親の

ひりえ 必死に代りけんどもあつて疎るる吾侪が愚痴と僻見あり世も死に共を怪まむ  
存在しとの父をの鬼もあらん変化欽と疑ひするの愚さよ許し多と白地は勸解つ  
泣共侶も鬼の軍節も泣腫も二重瞼も八重雲の如く憂ひへ世間は儔平の再會  
別離稚枝の花の年を歴く共白髪ある雪の松達の心う切解く本意ある對面成  
側あつて歡しうあつても只哀れを俺們が短気妹伏の縁し別れて後なきのみ  
おで雁の翼も絶果く音耗たぬあつて月のけふ七日の曉も名のとまりけをうられ  
年よ下つて牛織二星のあふ瀬のあふ死者の影も面や道水の如くぬ旅の衣も  
綴り合して冥土まで伴ひせせつれもかく長地嘆きを遠されしあつて身は今も  
措ちて憂またを脱くも萎む朝貞の果敢り露の玉の緒のくを絶よ目も  
月も照らさぬめをりまて秋何樂く存命人骸はまらるとも心変わりぬあつて  
後の世を憑りかたえれ死を死んと猶平が左右あり腕を伸く朴刀を取らん

取りも果む撥遣れが音音も俱に推禁めく狂をせやく鎮ゆる當下猶平声  
あり立ち理りおれども娘の達事の始終をえんと死んと早いの浅き女子あつて  
惑ひへ力二即尺八中を度るる日本魂の人よ捷りぬあつて死しとの後も主を  
親を慕く姿を人せんと然とくあつてその妻の命をせやく斬んとくつてでう靈を  
頭も死これあつてあつて天を恨む世を憤りて生を軽し死を樂むを只是愚  
疾の患をうもく良人の本意は情りて死して何れの益あるあつて戸田河津  
趣は似て意異し日を同じて語るる今つらくと案するふもあつてあつて子共の首  
級は道節の携られ又彼所の討捕もひ仇の首級をうぬるあつて主は忠信  
孝義の感應も庸事とあつてあつて況死生の命あり數あり良人よ代りて姑は  
仕へく且その善提を吊るそれを真の眞なるれかとも聴かぬあつてあつて  
諫むる鬼の軍節は大きくあつてあつて理りお切られかへをふりも泣顔をいぬく握りぬ

けさされハ音音ハやうあふらちの闇ハ天の色ハ明クありて反故張の窓の下をん  
 中へ喃息ハ達心ヲ鎮めて且も彼をんあうカ二郎ハ八ホガ姿ハ消亡されど其行  
 果ハ両箇をう舊の仇を彼処ハあり要ありはゆこれもまもく不忠謀のふ  
 かんどく披たさるる入といふまじく女同胞ハ目を拭ひてささやうえく像見を今  
 仇死ハ先かハ忘る隙ハあふ死ハやう歎きを真十鏡影ハ像もあ人の送せし  
 現何やうあんんをを馳く共侶ハ立上窓の片明り城も妹もまどかて程は  
 包ハカカハ氣身かづふれもやも滅残りける燈火の前面へあさう推居さう又落  
 然とらあはゆる曳ハハ音を口隠りしてかそ一ハ夢だもあさう絶く神をぬ地獄の  
 茂林の曠野やう彼二この病臥せしを妹と俱ハ勦りく馬ハ乗せし時ハ頻りよ  
 馬の屬強して中をあう一ハ畜生の世あはれ人をまや知りく駭怖れて乗せトとく  
 狂ハけりくあさう今曉さをも甲斐をれと脚ハ單節もあは波と然ハ所以を

この両包を馬ハ負さるるとか供はるるハが背負ひかの時やうもあは重さうあ覺る  
 が阿姑さるも齊せ大人もえあ喃阿姐さるもあ兵やう同胞が披く包ハ一雙の黒  
 草威の身甲の鮮血ハ塗れく韓紅ハ痛ハを送り鳥銃の裏缺ハ痕ハ六七ッ  
 八花菱ハ小鎌の既鑑ハ脚盾さう添さるこれをん彼を想像する良人さう陣  
 殺の烈さうけける戦ハのあはけんハ哀傷ハ涙もまく果ハ死音音も俱ハ塞  
 宵の痞ハ帯を引締くつうハやう娘ハ達継生涯歎くとも憂を遣ハ願ハ  
 あら死欲かづも奇ハ死縛の顔赤これハ夢とも現ともあは始く死親女房の袂ハ  
 解んくこの両包を送る子共ハ寔ハ神をけやかればその妻子とく志の似  
 ぶもあハと恥うたさう死涙を禁めあはをと鮮雄々く諫めその心の底ハ弱リ  
 果て鼻のさうもあはれさう歎死ハあは親あう稍平ハあ着てあ胸苦げ小嗟  
 嘆ハ音音が意見さうあはれこの身甲ハ腕鑑脚盾もまは素さう認りく

この力二郎尺八はが池谷より落つて来た。又も脱藏やと由河原の戦ひ  
 して一層は著て終に陣死をうらな然るを彼も世に死後これに妻子を送  
 りて今より良人は立代りて忠孝を命を保てといふ料をわんざんかれば  
 得せし存在を良人の首を并る日小まが亡骸をも瘞めて是をわりと拵を  
 見りと扱て取直して腹を切んとする程に吐嗟とええ音音より或は単節の  
 身と扱て身と扱てけりやと喃と叫び泣く右ひらう携る巻物あり落る涙を  
 多きまを物体なり俺們を今も諭しひぬる道理は惺惚とすう相恋し  
 うぬ刃物三味自殺の覚期はつふぞや。あひまをひひてを辨ひてく所妹が  
 うを勸辛して取鎮んと刀尖を廷置し縫首をせし喘々諫れは積千頭を  
 うち得くはくは心な怪我を最にひひを何とせしはぬ三日は田河や  
 死定むをせしけりも存在するは子共のあり年来故主へ下びも多き徳を勸

解りハ亦是恩義の為り疎遠つわく不実なれば程小主家の  
 滅亡子共は訪むと大義よりこの時を身と扱て彼舊恩を答んと受けしめを  
 今も小餘命を以て貧乏死年老力衰へく故主の先途をなすより死に死に  
 義士の素懐を哀れ哀れ死に死に死を樂む女子共と一列に死すあり其退びや  
 と敷園を疾視嗚るを推居るも身も単節へ死んぞをよと叫びてええ入る  
 音音の脈を衝と寄せく意情剛一措平ぬ一殉死のその身の本意ありは歸參の  
 免許を受けてもこの宿所を自殺せし法度を犯して故主を侮る罪を亦復あり  
 累に加柄莊役が拘傳する讐敵の下知状いられしもあつめを天明下りて還り  
 あり和子のうへと心ゆきや舊恩實は忘れぬ撃れ兩個の子共は代りて故主の  
 願は立影は添ひ死志き折は潔く死んとあひぬるや不覚あり死に寄れば措平  
 莞尔とらめ笑く寔はこれいられり。それと死ぬ私再會死ぬありあつぬであ

死を瓜田の履嫌疑を後よ送中一和子中見参憚りありてゆへ大塚が往  
 方と索く云と子共のうも宿志をも報くとも又かゆり兒鳴呼あつりと言き  
 せうく死を止れが鬼の単節の携りたる巻を杖めく共侶の辭を添へ慰を指平  
 のく諾ひく刃を輕く納め告別して外面へ出ると縁頼の障子を撤と踢切り  
 並立たる三箇の癖者真額鉢巻袴袴各身輕の打扮は是則別人を昨夕来り  
 注後根五平十六願介を左右に持て意氣揚々る声高き小汝小胸が淡々欲かくあ  
 べと昨夕より猜しれどもゆり氣を宿所へ還る面色しく裏を垣根の間荒る  
 背門より潜迫の死く簀子の下は終夜一五二十をみまきり音音はさく指平亦  
 是煉馬の残黨の道節が餘類より食縛やく白井へ牽ん腕を回せと呼ぶを腰に著  
 たる黒繩をさき取りて投るが如く仇糾繫扱く張肘の車は逆さ瑞輝の斧突立  
 たる十六願介も行杖めを仙声令て根杖も投る縁頼を突鳴りつ聞たり

第五十回

白頭の情人合色を遂ぐ  
 青年の嬌婦菩提小入

音音いひひくも敵の間者も裏を被さく陳志くもあがれが鬼の単節を  
 後方は添しく寄り所んと懐劍の鞘を握りて立んとするを指平はめくさく  
 推隔つ世も騒がむ踢踢る裳を引折く両三歩根五平亦進む向ひく冷笑ひ  
 噫物をちり人ホガ捕ま三昧鴻許あびぬ敵もあは足るあかぬ獨死ん  
 所作を足ふ今さう益の殺生も成はりや死讐敵の半隻望の隨は死天三途の  
 瀬踏をさせんと右の小携りり朴刀を左に取て挾くる必死の勢心むりハ得く  
 とも老人あればとあひ悔る根五平機譏る氣色もあ彼難仕せと敷圍は十六願介ハ  
 左右より合さる斧を振揚る撃拘んと走り蒐るを指平閃を遣違して技合一  
 する刃の電光左に流し右に柱く両三刀打中とえくる光に進り丁六を膳斜に破と





斬る砍のまき。苦と叫びも更び谷うら捨て外面へ逃んとし縁頬より落る軀は心地  
 両箇はまされて倒れけし顯介はこれを見えりて駭迷少く庖福のうへ走り避んとほ程ふ  
 音音が透る逆撃の刃は顔を劈れし叫苦とをり外面へ又引之を肩尖あり背を  
 胸へひんと砍られて痛ふぬ堪む幾歩投るが如く跌地走りて度は倒れ死をり  
 根五平は光景小舌を巻地膽を飛して立足もす縁頬を踏外へ滾落る技  
 せし腰を敲死つ伸つ慌忙に逃走を措平音音は倍とえく血刀引提く共侶追  
 撃勇とほ程小根五平は庭門を叩く頻り走りて人鬼の單節の氣を測りて  
 俱は焦燥ほどしもあだ奥のうへ人ありて鬼と被る声と齊へ出居の隔亮の間を  
 打ぬと銃鏡の窺遠む根五平は背を胸を撃れる苦痛の一声空を廻る御  
 反付けて息絶けしあひがひ助大刀は措平音音に驚死あぐり立駭くええれば  
 鬼の單節へ立ちて諸をさぐる破隔亮を裏面より颯と推開く頭れなる大山

道節と悠々と頤めて諭を隔亮を裏より小は舊の如く小閉さし上坐著  
 一がこれゆくとむり小音音があづその血刀を拭ひ納りて遠く主のほりへあふ  
 なん措平もあらぬ只は刃を納りてとが候は且外面は走りぬ根五平は死骸は立  
 ち銃鏡を被取りの頭を回して四下をうら荒田の唾は埋井ありて究竟の処は  
 とも多に軀の件は死骸を引撮起して推落り又立ちて丁六顯介が亡骸を掖  
 りて叩くおれ井の底へ落しおるこの時既天へ明く秋の初風涼しは朝餌を  
 求食する群雀の離色は降集るはのむかひの箇の亡骸を里人小はよんせどとく  
 ちもあはく隠せし音音はこれとをえくは團角を把く道節をうら扇ぎの合咲て  
 昨夕のせあひ陰は曉も還るをえくはのうらとあひ不樂く安くさう胸も稍  
 今もあふおれぬ。とて昨夕のあひの怪はあはれその疑ひの解れども  
 とらうき根五平は小焯の機密を知ると二人ありて撃漏るは狂津日の神ゆ

暴んを打つて還らせし。兄の裏の微妙さよと他事をくゞ。兄の単節も  
 後方小存一額つて、恙か死を祝け。道節はてさればよ。これ昨宵更蘭く  
 如此々の処で、犬塚小は索遭出た。ゆく大川共侶は彼三犬を相侶く、曉くふた  
 きの背門より入るとせし折、身は単節が哭声の堪ぬ、ぐう小字をうぐ異あつと  
 ぬあふん呼門も甚、彼人々とも、依奥は立乘居つ、扱猪平が事の趣カ二尺八寸、戦  
 獲の首級の錯悞、彼胞兄弟が七魂の業時姿を顯し、親と妻とを慰め、る。絆  
 むも、かく竊聞く、これに、ゆく大塚大川大領、大田の四犬士も、感涙坐お禁めり、る。  
 憐れ、カ二尺八寸、忠義の為、命を預せ、の形、は年来離別の父母を相合  
 せんと念、る。孝感空しく、びて、その二親の再會、は子共の靈の致せ、る。これ犬塚  
 小は、はる、とあり、皆是過世轉輪の業報、を覺、れ、をい、おと、原、ふ、これ、を  
 犬士の隊、入、ん、死、宿、因、の、天、々、か、ぬ、慈、と、玉、の、明、證、あり、この一條、は、云、云、と、昨、夕、大、川

莊助小吉、し、時、外、は、ま、く、と、か、こ、も、如、此、と、ま、つ、ん、さ、れ、ば、と、あ、は、し、猪、平、の、廻、燒、雪、は、不  
 と、舊、名、の、世、四、郎、の、雪、の、大、の、残、と、よ、世、の、鄙、語、も、あ、る、小、世、四、郎、も、亦、犬、塚、生、お、畜、れ、り  
 犬、と、同、名、の、況、カ、二、尺、八、の、四、字、を、ま、う、ち、く、又、合、ま、れ、ば、八、房、の、三、字、と、あ、る、彼、八、房、は、里、見、の  
 愛、犬、吾、黨、の、天、を、り、て、自、然、と、苗、字、お、せ、る、も、又、身、の、中、お、癒、あ、る、も、皆、彼、犬、の、類、り  
 けん、字、畫、を、ま、う、二、條、の、犬、塚、生、の、發、明、あり、昨、夕、彼、人、々、と、迷、お、意、中、を、盡、せ、り  
 詳、し、示、さ、れ、る、事、を、盡、説、し、似、れ、れ、も、カ、二、尺、八、を、名、と、の、ま、ま、相、識、か、ぬ、四、犬、士、と  
 延、ん、と、を、敵、を、防、だ、く、戦、死、せ、り、を、唯、任、決、の、所、為、の、ま、か、く、彼、の、共、も、山、林、房、が  
 り、お、似、く、八、房、の、天、小、宿、因、あり、り、あ、る、は、四、犬、士、の、窮、死、お、代、え、と、可、惜、命、を  
 隕、ん、死、せ、ん、と、欲、せ、り、猪、平、が、ぬ、死、が、う、り、子、共、の、忠、孝、天、の、命、を、る、陽、報、へ、未、世、に  
 美、談、あ、る、れ、が、身、の、單、節、も、あ、ひ、絶、く、哀、ま、を、傷、ら、れ、と、七、日、々、の、追、薦、供、養、を  
 ぬ、く、善、提、を、吊、ん、と、か、死、人、の、為、あ、る、れ、と、彼、の、三、世、の、主、後、乳、母、子、な、れ、ば、

俗よりの乳兄弟や恩義へ取らるるを喪ひ心の憂ひをいつたりとやあらん。  
 天飛ぶ鳥の両翼をもち落されぬのふ化るる然とて歎くも甲斐なし所行の世よ  
 馬も力二郎尺八が親とあり妻とあり幸ひと歎かぬひくもやう虎死して  
 皮をとる人死して名をを遺せ死に命と悟る誰か死ぶ人死せば  
 百歳の上壽を保つ命終る枕方は残る妻子のわがみ何時ともみかかむ  
 あべ死さむとてと親心は諭し言葉の末に置く露秋葉秋健々と膝は落せ  
 感涙小顔を背けて嘆息に恩義は厚き主命を阿と感し音音のうらも思ひ  
 単節の辱さ小回答るるの両袖を各顔に推當る只潜然と泣きたり中平の  
 知る道節うらむるをせられ世四郎然て圓坐に入らりけり。そりくとをがされば  
 稽平の稍近つてくも恭しく銃鏡を道節に返してのやう不肖の某愁死

後れいゆると見参入するを恥りくひ況二十年來の節を折きて音音を  
 訪ひい力二郎尺八が戦破の事の趣竊に妻子に報知して彼四士士の姓方を  
 究めんとあひのふ介る小昨又圖らむも田文とりの森蔭ゆく君小撞見多り大川生を  
 柱んとり違へる四箇の首級は舊縁の娼婦をわんごも送ら知らりし手  
 共の首級を其処ありと主君小携われり亦是恩義の感応かす。さればあや  
 その夜より大川生亦の四士士友垣を結せぬ死して悔かた子共が遺忠をよめ  
 遂ていといひの頼り小感激の臉に誠を顯せ道節も亦感歎く豫てその名を  
 穿小勝る老人の志氣頼直今眼前に行状をいれいしく感あつるも若かり  
 時一旦の過失の誰かあらん今あやしく羞るとも昔恩絶く忘るごとくを頼よその  
 子を相助けくもが為ふ心を盡せよの忠の功莫大七かれい今これをとて却り犯せ  
 彼一條を贖ふ餘さありあるも亡父尊靈はあり代りまらるる勘當を免まかり。父

あり音音を妻とてカニ郎尺八が亡魂を慰めよ彼れもそを本意わらわといはれて  
 猶平額を汗してこまめひうけぬが勘當赦免の一條に徹く火ども頭小霜を戴く  
 浮世小望が況子共を敵に撃せし歎の袂霧無常の嵐は花の萎と香の耗る  
 兩個の媳婦を寡ふあめ恥かえうく妻を娶らんやこめもて免許を稟さう一昨夕  
 音音を竊ふ訪ひしを舊情より引きやんと思食らる故あべいと朽せしくいと  
 辭せしうく怒られ音音も羞る額を拊く婚縁の身をいりあはれくさる疎しに  
 戲言も事わざうん要あはれをいひと咳に席中も堪むとんといふを道節急よ  
 呼ぶあめ焔よあめ腹をいひ言下口よりあめ駒も及びくう。まれば豈漫は戲  
 言して老人老女を辱めんや。目わりとも猶平とをいひ夫婦はせはあはれ忠孝よ  
 身を殺しうるカニ郎尺八が赤い画餅とあめん母のいひく義虫の父とぬれぬ彼が  
 愁歎その亡魂の頭れも尺このあめあめいひぬれぬその子を母のいひく父あはれめく

如くあるとけやうり父あり母ありくこの孝心を果さばると利害はそをわて分明之彼  
 樂とて淫をるをの噂構といひはれやこれを推辞ば子共の為小慈あはれめといはれん  
 便是カニ郎尺八が忠孝を賞はるの第一譏枉くま意小後へ又猶平が音意を  
 訪ひし素より情義の為あめ平証あはれめをこれいふと疑ふは事件の證に  
 こもわりとて懐あり二通の書状をいひうち披きてこれを音音に示してはる  
 是れ昨夕犬塚生よたどめ之對面せしは彼村雨の大刀を返して送る意中を説  
 盡し且猶平が身を向ひし犬塚生の云云と巨細告く音音へ與るその書状を  
 示されう。そを疑ふあはれぬもそをくその意をぬまりさ小音音に代りて件の  
 状の封皮を拊たぐりてけふカニ郎尺八が母の安否を問ふ状に又四犬士を紹介を  
 別紙に追書あれどもその由迹をわらうねばとも猶平が筆をたし。さばもこの  
 紹介あめカニ郎尺八が名をのこして猶平が名を署せう。嫌疑小憚る老人此

用心かんと精しつもの潔白を感しうこの一條も若平が志を知るとかぞえを  
 過失よかりんく神宮よ浮世を避しう敢又他家よ仕へば子共の為よ歸來せ  
 こつを音音がぬ小妻を娶ゆ事のあよ及ぶとて賞せよ天意よ違へん  
 カ二郎尺八の鬼魄いも遠く去らむ復立入りこれ聴け二十年来離別の  
 父母をひらふ合せい多くぬれ汝が考心の応報疑ひや恨しく汝を  
 今も席よ侍りて飲ぶ貞をえぬとよと西箇の首級を引寄せあち覆ふ  
 らる祇を半ひらたつくとく苦死胸のこもひを籠一壯士の泣ぬ泣く小  
 若平音音の白麻の有無の回答は口  
 隠りて賢る單節の慰めりて名とのと送せ良人のま迹のこれも紀念よかり  
 ありとて之をれば堪がぬ多めくの歎けり道節を勵して意ひひら  
 かくもよめをた折し何を歎えん酒りやあると答よと夷の單節の流を禁せ

まのよ還らせぬかか進らせぬとあひひらけあがう野の二拜なり侍見  
 かといふ道節領はく甚佳々々疾孟の準備をせぬかといふ小單節はるあ  
 ぬく地炕は柴を折焼ば鬼直は庖福よ赴けく酒壺をそが携来の同胞  
 酒を盪く折敷よ載はる孟の縁は缺ても相生の松の標の高蔭繪昔堅地の  
 老夫婦を如此に壽く七夫連の情願遂く俺們も面を起せ主恩の賜め  
 然バこのへあえしと祝し移せ鈍子小酒のそわりく看あられば夷の單節を  
 外よ望み求りぬせんと具くを道節聴くやとて外よ求る看あり彼究竟ある  
 物よをあれ田文の茂林より若平が持参の首級に當坐の納聘駈一三宝平亦を  
 看よせば鬮體孟の中あましく誰珍重せざる死をく席を改めよとより  
 かく音音若平を對ひ半くとんかやうかかたのいも物足らぬ木を伐るとのそ  
 斧をりて妻を娶る中を媒をりてを人の欲得とえ入り隔亮のあかこ小

声立く。ころむや雪のあゝ髪もうのとてくもとのりあり相生の松年ゆりけふ  
 あひ生の松をめぐりけりと謡連つゝあひく齊一席は著くものは是則別  
 人か座一の著座の犬塚信乃次は莊助現八小文吾皆借平小ち對ひて恩人  
 命恙なくもろくゆりくる再會ハ枯る枝小開く花を挿頭まもまた歡びあれ  
 きのお白井の厄難を脱しそく走るそ夜は不知案内の山路は迷くこの処へた  
 幸もぬもろく遠小通過よりを幸なりと莊助が犬山廻つと立く追つて索索あふ  
 あひぬそ久煙遠き山蔭ゆく世は憚の関もかければ野火を焼く四下を照し犬山  
 ぬの對面ハ送は意中をと死盡く渴望の素懐を遂よりかて食らわつて立て  
 未明もあへそるれども愁歎悲泣の折あふ驚きんはつがせ且く便宜を候ふ程小  
 兩賢息の義死孝感彼不可思議の一奇事小宵淡れ肉動はく慷慨嗟歎  
 堪さう死かろし程小癖者ホが利慾の爲小機密を撈さく不覺おその死成饋り

たる。患ふ不足のどもお又寄る敵りあんと且く後詰を心けく對面遠小  
 いまお。おあぎ。今小及べり嗚呼義あふ孝あふ世有く死而賢息の只俺們を延さんそく  
 其処小命を預されい。うち歎くおもあふ死而離別の二親をひととせんそく  
 亡魂の一夕あふ頭れハ憐稀ある死孝今その送志を果せん為小俺們四名ハ  
 この婚姻も氷人そんを樂へり便是カ二郎尺八の孝義ハ酬ふ寸志むり小  
 ぬが許さへべり也と正首ハ辭齊兼意を告てその婚席を提擲ハ借平羞る面色  
 ちく過世の業因うた故あ死をべりしを死せして子共を敷ハ刺相成りか  
 合色 辭さる方お故主の懇命お死がう人あさのく四柱の俊士英傑氷人となり  
 ぬんハ分小過る僥倖之當りくく固辭を道節推禁めく為ハ謝義を述  
 答礼しく音音受る單節ホと四犬士お引見せれば四犬士ハその不幸を悼之懇小慰め  
 つカ二郎尺八ハ首級小對ひて恩を謝し生るふめゆと誠心言下小頭をく金





其けが壯助も亦勝を獲て、彼定正八代敵之、今果ては、大山河、乃、其、越杉、竈門、ホ、カ、ミ、ノ、敵、兵、夥、討、捕、更、ハ、亦、後、難、義、ヲ、稱、リ、又、定、正、を、討、ん、ど、  
 勿、バ、八、代、士、具、足、の、日、小、里、兄、殿、を、相、佐、け、之、の、隨、軍、を、考、べ、今、ハ、其、時、を、  
 ば、と、以、現、ハ、之、ハ、同、意、ト、而、兄、寒、ハ、説、ゆ、カ、二、郎、兄、弟、の、首、級、を、竊、ニ、葬、り、  
 女、流、を、落、止、べ、ト、以、テ、傷、を、入、れ、小、文、吾、も、亦、領、江、之、の、究、竟、の、処、あり、  
 燒、雪、夫、婦、と、而、霜、婦、ハ、之、れ、行、徳、へ、入、り、適、ク、父、文、五、兵、衛、と、妙、真、ハ、憑、ニ、お、ろ、  
 後、安、け、ん、疾、を、の、准、備、を、考、え、之、と、四、人、齊、一、勸、ニ、道、節、の、説、ハ、後、之、馳、  
 稍、平、音、音、ホ、ノ、葬、の、事、を、ゆ、き、之、ハ、行、末、を、相、譚、少、カ、二、尺、ハ、首、級、の、今、  
 この、敵、地、ニ、埋、葬、ん、ハ、快、ク、之、を、之、れ、大、田、河、を、煩、え、ん、行、徳、へ、遣、し、  
 葬、り、を、ま、よ、め、れ、幸、中、し、馬、も、あ、れ、ハ、衣、裳、調、度、を、附、負、し、て、曳、也、と、單、節、と、送、代、  
 牽、も、せ、よ、乘、も、せ、よ、脱、浴、か、せ、と、急、せ、音、音、ハ、行、李、の、准、備、し、て、登、餉、の、料、の、控、

飯、を、人、別、小、果、程、小、曳、ハ、單、節、ハ、馬、菰、屋、の、馬、ハ、屢、穿、林、を、飼、め、録、頼、  
 近、く、牽、す、し、を、擔、の、柱、ハ、繫、繫、駐、ま、ひ、音、音、稍、平、音、音、ハ、不、並、ハ、跪、地、  
 豫、て、之、ハ、決、め、て、自、殺、の、方、ニ、之、の、標、を、考、え、之、を、考、え、之、を、考、え、之、を、考、え、  
 け、あり、尼、と、あり、良、人、の、善、提、を、吊、ま、し、之、の、方、の、ハ、許、さ、せ、之、と、以、テ、説、  
 備、の、刃、物、を、も、り、取、之、發、願、得、度、の、頭、髻、を、弗、と、剪、故、也、カ、二、郎、尺、八、音、小、  
 漆、て、二、袂、ハ、推、包、ニ、引、締、び、く、鞍、の、前、輪、ハ、附、る、小、ハ、稍、平、音、音、ハ、感、嘆、し、  
 之、ハ、小、竟、ハ、及、び、道、節、ホ、の、五、天、士、も、貞、操、節、義、を、嘆、賞、し、之、を、不、便、ニ、  
 音、音、ハ、曳、自、ホ、が、荷、を、附、る、馬、を、つ、く、と、之、ハ、頻、り、小、嘆、息、し、  
 豫、之、報、信、ハ、宛、實、客、達、安、也、彼、古、主、の、衆、替、や、く、年、來、秘、藏、の、逸、物、  
 煉、馬、の、没、落、ハ、敵、ヲ、取、せ、ん、と、之、を、之、ハ、而、個、の、媳、婦、を、合、鞍、  
 也、之、ハ、之、ハ、この、地、ハ、落、首、り、之、も、これ、古、主、の、像、見、と、之、ハ、貪、  
 也、之、ハ、之、ハ、家、ハ、畜、立、之、豫、て、ハ

和子の乗馬を多ひもの多ひ死に。昨日の共の死を又合鞍に乗せしめつけり。又わの子共の首を負して他郷へ遣らんとせし時として畜生まのまを朽をくやせん不便。今を多ひむを偲ぶ諄言も忠義の外に他がどか死現憑一死誠心をもて入念よく感しけるが中、道節の希望の婦女輩を下へ遣らんとせし。某を子共の代りて君小様ひきり、同様の諸君子の行勢を兼負えん何処までも召されよ。かといふを道節はあへてその究めなき益の談を聲が雲と水との如くこれより各袂を分た誰れ亦との往方を定めん。既而大塚生と別後の身を相譚し、今現在の六士の外、同因同果の二大士あつんこの智力をとりて押さふ由り、各隨音息武者修行して廻國年を盛む。わが遭をいふとあはれかれば、後者死にてもよければ、故の音音共侶は行徳へ討りかど諭せ、又四大士も辭を添へて禁めけ。稽平望を失くして、退死し、道節もとて世四郎の心を苦め、この三空平と駄一が目級をあらわ捨て、遺體を

脱去すといふ見え、庭門は鼻首せせし、稽平勇を起し、二級の首せりて、諸打戸の逆釘梁の串並べ、泉かけり、既而之起行の準備を、秘書あり、火道の術を、慨然と四大士をえり、某今一條の憤悔あり、家小様へ、秘書あり、火道の術を、獲らり、甚だ怒り、死件の柄、左道中、て勇士の行ふべ死のわだ、その要領、難く、臨み、一身を免す、その敵、克と死に絶え、要あり、尤恥べ死をふかふりて、目今その書を燔く、左道の異法を断ん、皆え、火道の秘書をとり、燃残る地炕の火中へ、念地礫と投捨す、火災と共に捕まの兵の、程中、潜寄けん、隊、十人許、柴垣の蔭、樹粒の間より、簇々と走り、御誑を、呼ぶ、縁頼、さうち登り、捕捕らんと競ひ、菓をあらわ、五犬士、立逆ひ、引受、修煉の天刀風、瞬間は、真額肩、矢向、敵當、ふ仕、て、破倒、を、技、も、海内、小、儔、稀、ある、勇士の、働、死、執、三人も、漏、さ、死、頭、顛、を、並、べ、撃、れ、け、り、さ、も、を、あ、れ、と、美、夫



立並びつゝ衣の衿を結り久しと血刀を拭ひ納る程もわが返はあまの陣鉦大鼓と聲皆  
 耳を歌て原來この隱宅をとも知りて駭くんとある是亦の雜兵のこゝに後詰り  
 大軍白井より推寄来るふととひきき中現ハを擔旁の松よきわくと攀登りて  
 して閃りて降く莞尔とち笑ふも以ぬ敵の軍配其勢九三餘騎田道里道捕  
 詰る既に間近く推寄来るありあつても吾黨が力を勤めて駭く破えん敗れどいふ  
 とあはあもりりりりと勇腕を振りて騒ぐ氣色のあるるを當下信乃ハ小文吾ハ  
 彼分捕の刀を贈りて某の幸ひハ大山生の厚義より復村雨の大刀を獲られ今ハ三  
 口の刀をとり獨和殿の副刀を敵のあつてもその大刀打れ何をも防ぐべし且これを  
 帯めとひひと處与せ小文吾ハ辱しと受とるも軋て腰を挿添けるその間も稽平  
 音音ハカ二郎尺八が像見の身甲投被て腕鎧ハ鉢巻精悍しく音音ハ納戸ハ秘  
 置るる薙刀を取て袂と稽平ハ朴刀を腰に帯び流石と頻り小文吾ハ道節及四大士を

諫るやう嗚呼が事うへども敵を悔めぬい七び謀りたぬの危し諸君の武勇向ふ  
 前かく鬼神を拉ぐらむ段ありとも寡をりて衆ハ敵去りて五指の弾や一指を打  
 ぐ後悔其処不立とて某夫婦ハあま籠りて命限りは奇をを防入近つぬ間ハ敵を  
 避くもく背路より落させ也此行住不便ゆめども鬼ハ單節がうへをの憑とを  
 只顧み入ら必死の覚期ハ四大士ハ道節が回答をせし頭を掉くるといひけるも  
 受ハ再生の大恩をおご一点も酬はせ況可憐兩賢息を駭かせ憾の大くこゝろぬ今亦  
 敵を豊ホよ住して苟やも脱せんやと諸声悍く否され道節も亦のこゝろ聴べ死一歩も  
 退く氣色なく俱ハ云と諭さふん鬼ハ單節も共侶やと齊一死をを究めける稽平  
 音音ハこれの言ハ又何と答けん畢竟燒雪夫婦の存亡五大士の進退のうふぞやと  
 編と謎れ巻を更く第六輯のよめ解ん姑く餘稿を輯外ハ措のよ  
 里見八犬傳第五輯卷之五終

編述

曲亭馬琴稿本



淨書

田中正造

画工

柳川重信 出像

校訂

中村喜作 神田菴 驥徳

家傳神女湯

一包ゆづん猪病おす第一産前産後ちのちまゆ又らちまゆし 羸るおひひのわひひと急へんをまゆの功あり又二日まゆをまゆし(何んぞ)

精製奇應丸

茶あゆをそとと効の加けんをまゆり製方むつありあまをく世上の類 茶とおゆづんを奇功効多神の如くつゆ月ひあへんをあつらひ知らん 大包三百粒餘入代式米 中包平六粒入代式米平下 小包十粒入代五分

婦人つね虫の妙薬

つね虫の正まあるをそとと効をまゆり製方むつありあまをく世上の類 加らんをゆてまこのたふその功をまゆり 一包代六十四文 半包代三十二文

熊膽黒丸子

熊胆の正まあるをそとと効をまゆり製方むつありあまをく世上の類 加らんをゆてまこのたふその功をまゆり 一包代五分

製薬并弘所

取次所 江戸芝神明前ゆづり市まゆり○大徳寺橋あか物町南へ河内登太助 江戸元飯田町中阪下南側四方みま店の向 神田明神下山本町筋同明町東新道入口 瀧澤氏



大阪

東京

河内屋喜兵衛	須原屋茂兵衛
伊丹屋善兵衛	山城屋佐兵衛
敦賀屋九兵衛	小林新兵衛
秋田屋太右門	丸屋善七
河内屋茂兵衛	和泉屋市兵衛
河内屋和助	須原屋伊八
秋田屋市兵衛	出雲寺萬治郎
出雲寺文次郎	院屋喜兵衛
村上勘兵衛	辺江屋半七
勝村治右衛門	長門屋龜七
杉本甚助	三家村佐平

名山閣

東京芝大神宮前書舗

和泉屋古兵衛發售

